

いきすぎて、夢みたいなんだもの」

ジャントウが笑いながらいった。

「こんなの、まだまだ序の口だよ。そのうち、おとなむけの本物の配給があるからね。そっちのほうが、何倍もいいんだから！」

満腹のあまり、思わずフーツと息をつくくと、わたしはアカシアの幹に背中をあずけて、ふくれたおなかをさすった。皿の上には、最後のひと口にと残した肉のかけらがひとつ。それをゆつくりとスプーンですくって口に運びながら、わたしはやっぱ信じられなかった。これよりいい配給なんて、ほんとにあるんだろうか？

4 希望

つぎの晩、ジャントウの家族といっしょに夕げの焚き火をかこんでいる時、おとなたちが食料配給の話をはじめた。わたしは耳を傾けながら、ジャントウの弟を抱きあげ、ひざにのせた。

ニアによれば、このノンチャン難民キャンプには、二週間おきくらいにトラックの団がやってきて、コメや食用油、塩魚などの食料を運んでくるのだそうだ。ニアが兄さんと母さんにいった。

「あなたたちが配給をもらえるまで、うちのをいっしょに食べましょう。ここじゃ、みんなそんなふうやってるから。早く着いた者が、あとからきた者に自分たちの配給の食べ物を分けて、その人たちがまたつぎにきた人に分けて、それでうまくいつてるの」

「でも、自分たちの配給はどうやってもらえばいいんだい？」と兄さんが聞いた。

「トラックがくる二、三日前になると、もうすぐ配給だつてうわさが広まるの。そしたら、